

平成29年7月九州北部豪雨

福岡大学 工学部 社会デザイン工学科 助手

古賀 千佳嗣

平成29年7月九州北部豪雨では、数時間で局所的な大雨により河川やため池が許容水量以上となり、大きな被害を受けました。この災害により『線状降水帯』の言葉が周知されたかと思えます。本内容は自身の災害経験から災害とごみについて記述いたします。

災害当日の状況

当日、私は久留米に出張しており、大雨で家中に雨水が流入しているため非難すべきか、妻から連絡がありました。非難を指示し、私は帰宅しようと高速道路を走行すると、鳥栖付近で黒い雲に覆われ、視界を失うような激しい雨に打たれました。自宅に到着したときには、河川兩岸の道路面まで水位が上がり氾濫寸前でした。地域の方々は、氾濫対策や他の雨水の侵入を防ぐため、土のう袋を作製していました。しかしながら、到着して10分もしないうちに水位が自動車のタイヤの半分まで達しました。私は、できる限りの雨戸を締め、町の公民館へ避難しました。私たちの地域は高齢者が多く、自力での避難が困難なため、地元の警察官や消防団員の方とともに救助を行いました。道路は腰付近まで水位があり、成人男性でも歩くのに苦勞するほどでしたが、無事全員の避難ができました。

夕方、雨脚が弱くなり水位が下がったため、貴重品の盗難防止や二次災害



写真1 災害当日の様子

に備え帰宅しました。地域の半数の家が灯油ボイラーで湯を沸かすため、周辺は流れ出した灯油で強い臭いが漂っていました。それから1時間もすると、再度大雨が降り、避難先で流れ出す家屋の様子をただ見ることしかできませんでした。

明け方、周囲は今までに見たことのない風景が広がり、大量の土砂と各家庭から流れ出した家具や車、自転車が散乱していました。道路の一部はアスファルトが剥がれ、アスファルト舗装板が家に刺さる状況でした。

災害復旧作業の状況

復旧作業は、さまざまな被害を受けている中、状況を把握しきれないまま、進めなければならない状況でした。復旧作業にあたり、まずは動線の確保が重要であり、道路上にある土砂の撤去を優先しました。これまでの震災などの経験も踏まえ、処分の分類や、仮置きすべき場所の選定が重要であることを認知していたため、地域の方と打ち合わせをし、それぞれの私有地の空き地を有効利用して仮置場の選定を行いました。地域全体の活動もあり、2日後には動線を確保することができ、多くの物資や重機、人員の移動が可能となりました。職場の先生方、学生や卒



写真2 復旧作業の様子

業生、多くの方が復旧作業の手伝いに駆けつけてくれました。

復旧作業では、井戸水が主体の地域のため、井戸の配水ポンプが破損し、水が使用することはできませんでした。また、泥水のためスコップで掬いあげるのも容易ではなく、掻き出しに時間を要しました。さらに、建屋の構造はそのままのため、入り組んだ場所や狭隘部の土砂撤去作業に奮闘しました。衛生面においては、土砂の中には細菌が多いため、ボランティアの方々の保護具や消毒が必要であり、かつ夏場の暑い時期であったので、熱中症にも注意しなければなりません。

災害時のごみ問題

災害復旧の際には、残すもの、廃棄するものの分別が必要であり、いくつか問題点がありました。

一つ目は、泥水と混ざっているため区別するためにはまず洗浄しなくてはならないことです。電化製品なども異形で細かいものなどは洗浄だけで時間を要します。また洗浄しないと重たく、運び出しにも一苦勞になります。また、水害で流れ出した物、流れ込んだ物があり、処分の区別ができないようなものや、高価なものが土砂の中にあり、

取り出しと分別に時間を要しました。現地では作業効率を上げるため、取り出し、洗浄、判断、処分の流れ作業にし、判断後にごみの種類別に分別しました。

2つ目は、置き場の中継収集場所がないことです。殆どの物は家屋の中から外に出します。しかしながら道路に面した住宅は、動線確保のため、道路に出すことも難しいです。また、処分ごみの置き場の置き方も、大きな収集場所では、鉄や木材、電化製品など分別されますが、地域の仮の収集場所には、その判断はなく、とにかく収集されることです。そのため、災害時は、仮の仮置場を設け、掻き出し土砂や、物をとにかく置ける場所を設定し、その場所から分別する場所を別に設け、ごみの分別にあたりました。

今後の対策

災害直後は状況判断が難しくなりがちです。復旧時のごみ処理方法を考える余裕がありません。しかしながら、ごみも資源であり生かさなくてはなりません。災害時の備えとして、地域をあげ、判別や処理方法を事前に学び、マニュアルを周知することが重要と考えます。



写真3 仮置場の様子